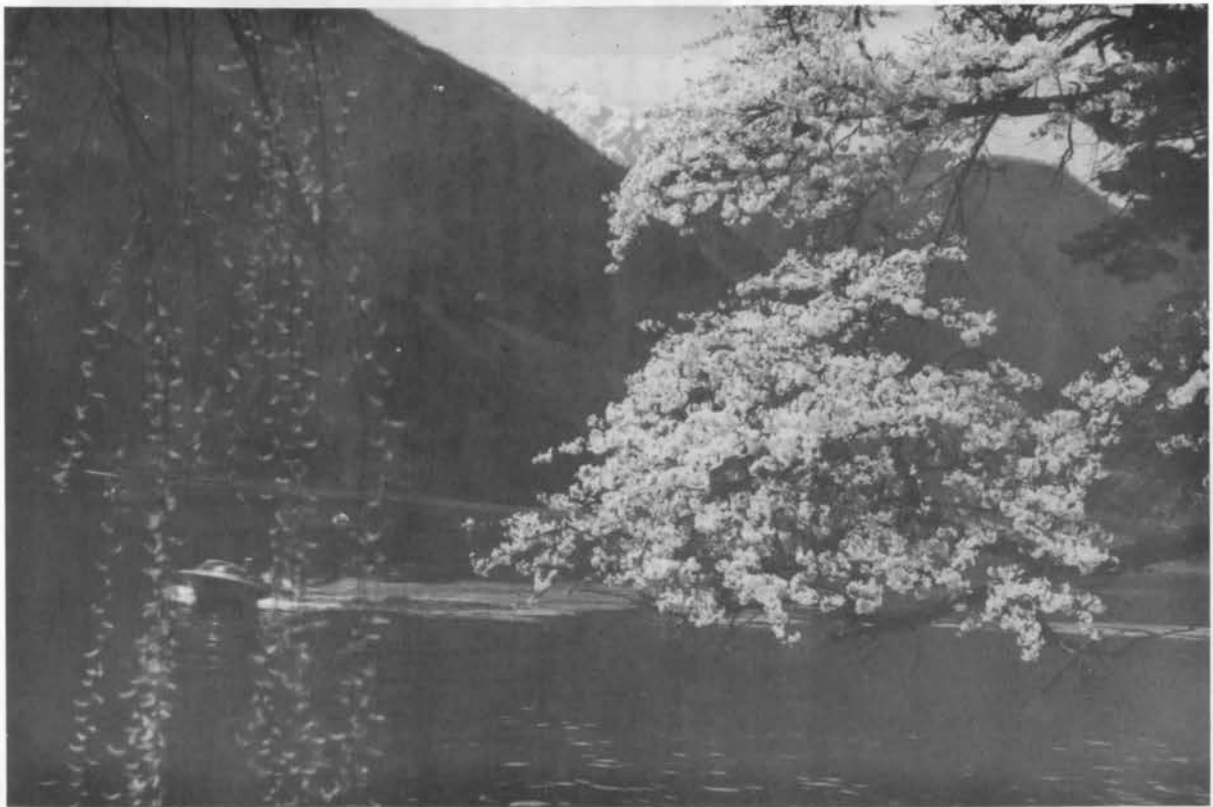


山と博物館

第24巻 第4号 1979年4月25日 大町山岳博物館



春の木崎湖

撮影 伊藤 則夫

山麓の楽しみ

幾たびかゆきつ、もどりつする春の歩みが、それはもう確かな足どりで近づいて来る季節の日々がある。春の遅い北安曇、大町の野づらにも春がよみがえる時である。それは、四月中ごろから、五月の初めにかけてであり、この時期から約一ヶ月がこの地の一番美しい季節と私は感得している。そしてそれはいわば山麓の楽しさともいえるべきものである。

その一つは、やはりなんといっても芽ぶく若草、木々、寒さの中にも咲き出す野生の花との出会いである。春の息吹きはゼンソウ、フキノトウに始まり、シヨウジョウバカマ、イチリンソウ、カタクリ、サクランソウ、イカリソウ、イワカガミと続く。木崎の湖畔の林下にはひっそりとシヤガも咲く。山すそにはダンコウバイ、アブラチャン、マンサクが淡く黄色に、フサザクラは独特のピンクに、各々春の初めらしい優しいひかえめな花をつける。コブシもうつすらと白く尾根筋を染め、オオヤマザクラの濃い桃色の花がゆれる。

花や木の名まえはともかく、それらを訪ねて湖畔を林を歩く時、自然の神秘さ、自然の恵みの深さを感じる。そしてこの地のよさを思う。そうした山や野の道を歩きながら、取られた福寿草やカタクリの跡をみながら、私は反省もしている。最近、山菜、野草、薬草ブームで沢山の凶鑑も出てまことに都合がよくなったが、たとえ食べられても、薬草に利用できたりしても、もう採っていいものと保護すべきものとを区別すべき時に来ているのではないかと。

さて、もう一つは、山麓から眺める後立山連峰の残雪の山々のすばらしさである。土蔵や前山の前景とあいまって、富山や高山にも松本や伊那谷にもないみごとな山なみである。桜並木の下から雪形を指さす日も近い。

(清沢由之 山岳総合センター職員)

高山の鳥

塩原 克広
三石 絃

信州鳥類生態研究グループ(代表・羽田健三信州大学教育学部教授)は、長野県林務部の依頼をうけて、昭和四十八年の春から夏にかけて、県下の代表的な山岳地帯の野鳥の棲息状況の調査をしました。

第一図に調査地点を示しました。北は苗場山から南は南アルプス光岳まで十九の山岳で、約四十名の調査員が、どこに(地形・植生)が、どのくらい(密度)、どのような状況で棲んでいるかについて、詳しく観察しました。

調査方法は、ライン・トランセクト法と呼ばれる方法です。鳥の活動がもつとも活発な時刻に、高山帯の登山路をゆつくり進行し、左右二十五米づつの視野に現れる鳥について、注意深く観察記録する方法です。このような方法で、一つのシーズンに、これだけたくさん

んの高山の野鳥の生息状況を調査したことはおそらくはじめてだと思われれます。

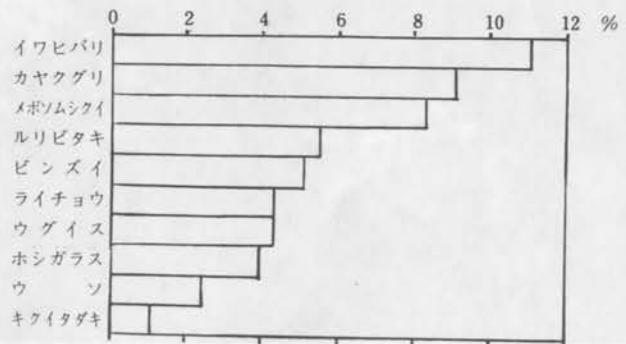
どんな鳥が、どのくらいいるか

調査した十九の山岳の出現種を全てあわせてみると、二十六種になります。ライチョウ、イワヒバリ、カヤクグリというように高山帯とはきつてもきれいな種はもちろん、ホシガラス、メボソムシクイ、ルリビタキ、キクイタダキ、ヒガラのように針葉樹林に好棲する鳥、ササのあるところなら低山から高山まで分布するウグイス、岩壁に巣をかけるアマツバメ、イワツバメなどが主です。しかし、高山といっても、全てが穂高岳のような典型的な岩稜地帯をもっているとはかぎりません。苗場山では山頂付近にモズやキジバトも出現



ライチョウ(箱ヶ岳にて) 撮影 三石 絃

第二図 主要種の優占度



第二図は密度の百分率をグラフにしたものです。二十六種もの野鳥がいるにもかかわらず、



イワヒバリ(箱ヶ岳にて) 撮影 三石 絃

ず、たくさん棲んでいる種は限られていることがわかるでしょう。この図に登場する十種が、いわゆる高山で普通に見られる鳥といつてよいでしょう。そして、稜線の登山路付近が、岩稜だけとか、ハイマツ群落だけというように単調でなくてさまざまな植生や地形がモザイク状に入りこんでいなければならないほど、たくさん種が見られるといえます。なぜならば、環境が複雑であればあるほど、いろいろな種が棲むことが可能だからです。

鳥の組み合わせからみた高山のタイプ
高山の代表種、ライチョウ・イワヒバリ・カヤクグリ
の生息の有無から、中部山岳の高山は次の三つのタイプに分けることができます。
I: イワヒバリ・ライチョウ・カヤクグリ



ライチョウ (爺ヶ岳にて) 撮影 三石 絳

岩稜にたたくむライチョウ、山小屋の屋根でさえずるイワヒバリ、ハイマツの海から聞こえるカヤクグリの鈴をころがすようなコーラス：汗を流してたりつ

行を 高山の鳥を見るための山 第一表に高山鳥の主要三種ともいうべき、イワヒバリ・ライチョウ・カヤクグリの多い山岳ベスト10をあげてみました。山登りのたのしみの一つの要素に、鳥を見るたのしみを加えていただきたいと思うからです。

部分などに小規模あるだけですが、ここにカヤクグリが棲んでいます。このタイプには、志賀高原の横手山などがあげられます。

群落やお花畑の要素が少ないのが特徴です。したがって、ライチョウが棲めないことはないけれど、たくさんの個体を養うことができぬと考えられます。中央アルプスも八ヶ岳も過去にライチョウの記録はありますが、現在は常棲してないとみられる方が妥当のようです。また奥秩父の一部にはライチョウを移植したこともありましたが、本来は生息していなかった山岳です。Ⅲのタイプは三国山脈の苗場山です。カヤクグリののみが棲みます。山頂までオオシラビソの森林が続く、高層湿原の発達した、日本アルプスとは全く異なった様相を示す山岳です。ハイマツも点在しますが、湿原の高めの地形の

第一表 ライチョウ・イワヒバリ・カヤクグリの密度が高い山岳ベスト10

ライチョウ				イワヒバリ				カヤクグリ			
山	岳	名	密度	山	岳	名	密度	山	岳	名	密度
1	仙	丈	0.63	1	穂	高	2.30	1	光	岳	1.33
2	穂	高	0.48	2	御	岳	1.25	2	塩	見	1.12
3	赤	荒	0.34	3	赤	岳	0.88	3	穂	高	1.03
4	上	河	0.25	4	赤	岳	0.71	4	乗	鞍	0.86
5	爺	ヶ	0.20	5	仙	丈	0.63	5	金	峰	0.80
6	燕	大	0.16	6	赤	荒	0.58	6	爺	ヶ	0.60
7	乗	鞍	0.14	7	白	馬	0.56	7	上	河	0.50
8	聖	岳	0.14	8	光	岳	0.55	8	赤	岳	0.47
9	塩	見	0.12	9	駒	ヶ	0.45	9	御	岳	0.37
10	白	馬	0.06	10	燕	大	0.37	10	鳥	帽	0.32

密度は1ha毎の個体数 穂高岳は西穂・奥穂・前穂の稜線

いた山頂で接する鳥たちのなんと生き生きとしていることでしょうか。それに、鳥たちは、種ごとに好棲する環境が異なっています。ですから、鳥たちを注意深く観察することは、山の自然を広く理解することにつながるのです。この表をじっくり検討して、あなたの山行スケジュールに、鳥を見るための山行をひとつ加えてはいかがでしょうか。なお、もっと詳しいことを知りたい方は、信州鳥類生態研究グループでまとめた「長野県の野鳥」(長野県、一九七七年)をごらん下さい。本文をまとめるにあたり、図表の一部を同著から引用してあります。(塩原・松本市立菅野小学校 三石・長野市立樺花中学校、いずれも信州鳥類生態研究グループ所属)



カヤクグリ (爺ヶ岳にて) 撮影 三石 絳

まぼろしのタネズミ

土屋 公幸

日本産のネズミ達がヨーロッパの人達に紹介されたのは十九世紀の中頃であった。それは医師ジーボルトが我国に滞在した六年間に各地から蒐集した動物標本等を持って帰国し、ライデン博物館のテミンクとシュレールが動物標本を調査して「日本動物誌」に発表した時である。これから述べるのは、テミンクが分担した哺乳動物の一部にムス・タネズミ(日本名タネズミ)として記載したネズミのことである。当時の記載は、今と異なり、全長や尾長、毛皮や生態の簡単な記述があるだけで、採集地や図版に描かれている頭骨に関する記載はまったく無く、またタイプ標本の指定もないという簡単なものであった。そのため現在に至るまでタネズミが日本の何のネズミに対して付けられた名前なのか判然としていない。その原因はもちろね原記載の曖昧さにあるが、同時に日本の分類学者が一人としてこのタイプ標本を直接調べたというのをしなかつたためでもある。筆者は、一九七二年十二月に大英自然史博物館所蔵のクマネズミ全亜種の標本を調査し、一九七八年十二月にはライデン自然史博物館においてタネズミの標本を調査する機会を得て、永年の謎を解くことができた。

タネズミ研究史
一八四三年。テミンクがムス・タネズミとして記載した。
一九〇五年。トーマスはムス・タネズミとして、青森県野辺地町馬門と山形県米沢市高湯でそれぞれ一頭を採集し、中国のムス・ロゼアと類似していると報告した。
一九一五年。青木文一郎は「日本産ネズミ科の中でエビミス・タネズミとして、知る

に由なし」と原記載を引用している。
一九二五年。岸田久吉は「哺乳動物図解」でタネズミの学名にラタス・タネズミを使い産地はトーマスを引用し形態は原記載を引用した。
一九四〇年。黒田長礼は「原色日本哺乳類図説」でラタス・(?)ロゼア・タネズミとしてロゼアに最も近似したものとした。
一九四一年。エラーマンは「現生齧歯類の属と科」でラタス・ラタス群の一つとしてラタス・タネズミを上げている。
一九四一年。徳田御稔は理由を述べず、ドブネズミ(ラタス・ノルベジクス)の異名として記している。
一九四九年。今泉吉典は「分類と生態日本哺乳動物図説」でラタス・タネズミは日本のクマネズミ(ラタス・ラタス・エリスロノータス)に酷似しているが体が余程小さいと記している。
一九五一年。エラーマンとモリソンスコットは「旧北区とインドの哺乳類目録」でクマネズミの一亜種で本州に分布し、見たところ住居性らしいとして記している。
一九五四年。徳田御稔は「野鼠とその防除」の中でジョーボルトの

「日本動物誌」のうちドブネズミに相当するものとして(ムス・ドクマヌス)と(ムス・タネズミ)が記載されていると述べている。
一九六〇年。今泉吉典は「原色日本哺乳類図鑑」で本州の山間地にニホンクマネズミ(ラタス・ラタス・タネズミ)が棲むとした。そして本州、四国、九州の大部分にいるのはニホンクマネズミとヨウシユクマネズミの交雑によって生じた中間型と思われるとした。
一九七八年。コーベットは「旧北区の哺乳類・分類学的レビュー」でクマネズミ(ラタス・ラタス)の一亜種として中国と日本に分布するとした。

以上の研究はすべて形態に基づく分類に依るものであるが一九五一年のエラーマンとモリソンスコット以降はクマネズミ(ラタス・ラタス)の亜種として扱われている。ところが一九七一年に筆者は本誌「山と博物館」で日本各地で採集したクマネズミの染色体数はすべて四二本であつて欧米に分布するヨウシユクマネズミの三八本とは明確に区別出来ることを明らかにした(詳細な研究は国立遺伝学研究所吉田俊秀博士によつて発表されている)。しかも両亜種の交雑した個体の染色体数は三九本であり(吉田他一九六九年)、今泉(一九六〇年)が記したような交雑の事実はない。ヨウシユクマネズミは日本の港に少

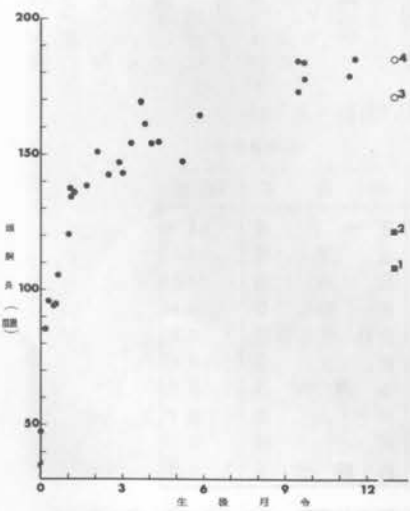
数が船の荷物とともに侵入している(土屋未発表)が内陸に分布を広げることが出来ないと考えられる。
タネズミのタイプ標本
ライデン自然史博物館を訪ねたのは一九七八年十二月八日の午後一時半頃であつた。それから五時の閉館まで標本室で日本産ネズミ類のタイプ標本の毛皮と頭骨標本を調査した。タネズミとラベルの付いた本割製標本は五ポイントであつてそのうち二点がテミンクが原記載に使つたタイプ標本であつた(登録番号二四二〇六、a標本。二四二〇七、b標本)。

現在の日本のクマネズミと比較して明らかに小型であるが、それは第一図の日本産クマネズミの生長と比較して見れば了解できよう。特に小型のb標本は第三上臼歯が未萌出の幼獣であつて生後一ヶ月にも満たない個体であつた(第一図の1)。a標本(第一図の2)は臼歯を総て萌出しているが生後二ヶ月に満たない幼獣であつた。しかし、両タイプ標本とも現在日本で採集されるクマネズミの幼獣と同じであつてドブネズミではなかつた。大英博物館収蔵の日本産タネズミの標本も総てクマネズミであつた。従つてテミンクによつて記載されたムス・タネズミは日本のクマネズミであり、その学名はラタス・ラタス・タネズミということになる。

なおこの調査は文部省科学研究費によつて行われた。(北海道立衛生研究所)

第一図 ニホンクマネズミの生長(頭胴長)

- 1、タネズミ (no. 24207, b 標本)
- 2、クマネズミ (no. 24206, a 標本)
- 3、ニホンクマネズミ (成体26頭の平均)
- 4、ヨウシユクマネズミ (成体50頭の平均)



山と博物館第24巻第4号
発行所 長野県大町市TEL(0261)2211
印刷所 大町市表町 大町山岳博物館
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)二二一九三